

フィールドワーク・インターンシップ実践報告

インドネシアにおける「海外インターンシップ」パイロットプログラムの実施報告

榎原正幸 (環境デザイン学科) 砂田寛雅 (社会共創学部事務課総務チーム)
寺谷亮司 (地域資源マネジメント学科) 広垣光紀 (産業マネジメント学科)

A Practical Report of a Trial of International Internship Training Program in Indonesia.

Masayuki SAKAKIBARA (Environmental Design)
Hiromasa SUNADA (Faculty of Collaborative Regional Innovation)
Ryoji TERAYA (Regional Resource Management)
Mitsunori HIROGAKI (Industrial Management)

キーワード：海外インターンシップ、トランスディシプリナリー・アプローチ、ステークホルダー、プロジェクト学習
Keyword: International Internship, Transdisciplinarity Approach, Stakeholders, Problem Based Learning

【原稿受付：2017年6月29日 受理・採録決定：2017年7月14日】

要旨

平成28年4月に設置された社会共創学部は、トランスディシプリナリー・アプローチ¹⁾に基づいた教育を展開し、地域社会の課題解決を担う人材を育成することを教育理念として掲げている。「地域社会の課題解決」のためには、地域社会の多様性を俯瞰した上で、課題解決を目指すことが重要である。社会共創学部では、学部共通の選択科目として「海外フィールド実習」および「海外インターンシップ」をカリキュラムに置き、多くの学部学生を海外に派遣し、国際的視点を涵養することを目指している。

「海外インターンシップ」は、平成30年度に3年次学生を対象として新規に開講する選択科目で、インドネシア共和国の日系企業を実習先とする。本学部では、平成28年3月より本授業科目の円滑な実施と質の保証を目指し、学部内での授業プログラムの構築ならびに受入企業との交渉を重ねてきた。本稿は、「海外インターンシップ」の実施に向けたプログラム構築に係る実践報告である。授業担当教員である、榎原、寺谷、広垣、ならびに授業支援者である砂田が、平成29年3月5日～10日の間、PT Panasonic Healthcare IndonesiaおよびPT.FUKUSUKE KOGYO INDONESIAの2社において「海外インターンシップ」のパイロットプログラムを実施した。本稿ではパイロットプログラムの実施を中心に報告するが、とりわけインターンシップの質に関して重要な要因となる事前準備についても触れる。

1. はじめに

平成28年4月に設置された社会共創学部は、地域社会を価値創造へ導く人材の育成（地方創生を担う人材の育成）を教育理念に掲げ、国内外におけるフィールドワークやインターンシップにおいて、学生・教員・地域ステークホルダー²⁾が一体となって課題解決に向けた実践的なチームラーニングを行うことを教育の特徴とする。このため、フィールドワークおよびインターンシップを教育課程のコア（実践力育成科目群）に据え、国内外をフィールドとした実践的授業を体系的に実施することとしている。一方で、「インターンシップの実施内容について、大学が主体的に関与することは多くなく、このような課題を解決するためには、教職員の意識向上、企業とのかかわりを深めていくことが不可欠」（折戸、2015）とされるように、学習の場を学外に置き、地域ステークホルダーと共に実

施するインターンシップにあっては、周到的準備を行うことが当該授業科目の質確保のために特に重要となる。特に、大学と地域ステークホルダーとが対話を通じて授業目的を共有し、プログラム内容を協働で構築することが重要となる。このため、筆者らは、「海外インターンシップ」実施に向けた事前準備を平成28年3月から開始した。本稿では、とりわけインターンシップの質を左右する事前準備について触れた後、パイロットプログラムの実施結果について報告する。その後、実施により浮き彫りとなった課題、およびその解決の方向性について述べる。

2. 事前準備に関わる手続き等

今回、「海外インターンシップ」の実施に当たって、選択した受入先候補企業は、PT Panasonic

Healthcare Indonesia、PT.FUKUSUKE KOGYO INDONESIA、PT.KATOLEC INDONESIA及びPT.DAIKI AXIS INDONESIAの4社である。これら企業は、いずれも県内あるいは四国内に本社あるいは支社を有する。紙面の都合上、組織概要は割愛するが、4社とも製造業に分類される。それぞれ、製造工場を有しており、日本人が経営部門を、インドネシア人が現場部門を担うという組織構成で、かつ後者の社員が圧倒的に多いことで特徴づけられる。これらの選定に関しては、インドネシア愛媛県人会会長の黒田憲一氏らの協力を得た。

これら企業とのプログラム実施に関する話し合いは、平成28年3月に開始した。まず、各社の訪問時に、組織概要、周辺的生活環境、治安状況、アクセス方法および宿泊先等の情報を得るとともに、本授業目的、実施内容およびスケジュールについて説明した。また、各社の社員の業務内容や就業状況に関して質疑応答を行った。その後、担当教員による協議において、ジャカルタ空港からのアクセス、実習期間中のセキュリティおよび持続可能性を考慮して、実習先は同一の工業団地内に立地するPT Panasonic Healthcare IndonesiaおよびPT.FUKUSUKE KOGYO INDONESIAの2社が選定された。両社は、ジャカルタ中心部から20キロほど離れた、ブカシ市のMM2100工業団地内に立地している。MM2100工業団地は、1990年から、丸紅がアセアン諸国および中国における工業団地事業において開発・分譲および運営・管理を進めており、日系企業約180社が集積している（丸紅工業団地事業サイトより抜粋）。

「海外インターンシップ」パイロットプログラムの実施要項案を授業担当者間で策定した。本授業が、学部共通科目として開講するため、所属する学科、専門性に関わらない授業設計とすることが課題となった。学生の専門性、興味関心に関わらず、働くこととは何なのかを考えるきっかけとなることを目指し、以下の

ような授業目的を設定した。パイロットプログラムということから、滞在期間を授業実施で予定している10日間から4日間に圧縮したため、課題探索に係る工程を省き、既に企業組織内に存在する課題をあらかじめ提示し、当該課題解決に向けた提案を行う流れとした。加えて、企業の立地の違いが、組織文化、職業観に与える影響について実感・説明できるよう、事前学習として、PT Panasonic Healthcare Indonesiaの日本法人である、パナソニックヘルスケア株式会社重信工場を訪問する内容を案として盛り込んだ。

授業目的：

地域社会における私企業の役割から持続可能な地域社会についての課題は何か解決策は何かを考察すること及び当該プロジェクトを通じた企業研究をはじめプロジェクト学習による社会人基礎力を涵養することを目的とする。

実施要項案を基にして、平成28年10月からスカイプもしくはメールによって訪問先2社との事前打合せを開始した。事前打合せにおいて、各社が抱える課題の提示を依頼したところ、「漠然としているので、企業活動におけるどのような部分なのか提示して欲しい。」という声各社から上がった。このため、低年次学生でも理解しやすい、「社員がやりがいを感じ、成長できる仕組み」を課題として提示することとした。事前打合せでは、授業内容に関すること以上に、宿泊先の確認、会社へのアクセスの確保、近隣病院の確認、取得すべきビザの確認ならびにビザ申請作業などについても綿密なやりとりが担当者間で行われた。特に、ビザの種類を、ミーティングビザとしたことから、ジャカルタ入国管理総局からの査証発給許可証や受入先が作成する英文招聘状の発行など、受入先企業担当者の多大な協力によって、事前の準備が行われた。双方の協議によって作成された実施要項最終稿（一部抜粋）を表1に示す。

表1 海外インターンシップパイロットプログラム実施要項

参加予定者・実施時期 人数：10人程度 開講時期：平成29年3月5日～10日
プログラムの目的 「海外インターンシップ」は、多様な国際経験を通じてグローバルな視野を涵養することによって、今後各地域に到来するいわゆる「グローバル化の波」の中で地域の課題を解決する就業意識・判断力・創造力・行動力・危機管理能力を身に付けた地域社会で役立つ人材を育成することを目的としています。本プログラムは、3年次に開講される「海外インターンシップ」のパイロットとして実施します。日系法人が多数進出しているインドネシアにおいて、現地研修を含むプログラムに参加し、その活動を通して、海外企業における就業意識・異文化に対する理解を深めるとともに、今後の学生生活における自己のモチベーションを高めることを目指します。

インドネシアにおける「海外インターンシップ」パイロットプログラムの実施報告

プログラムの目標	
<ul style="list-style-type: none"> ・海外の異文化に対する理解や適応力、英語コミュニケーション力を養う。 ・自分の適性をグローバルな視点でより深く知る。 ・海外で活動する日系企業や団体への理解を深め、将来のキャリアの方向性をより明確に捉える。 ・海外の企業が抱える課題を発見し、解決するための独自の企画を立案することができる。 ・外国人に対してプレゼンテーションを行い、自分の意見を伝えることができる。 	
プログラム概要	
<p>第1回 説明会及びコースの選択 [2月14日(火) 17時～18時30分]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「海外インターンシップ」の説明及びグループ分け。実習に同行するインドネシア人留学生との交流も実施。 <p>第2回 サバイバルコミュニケーション [2月20日(月) 2、3、4時限目]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現地語及び英語の日常会話について講義及び留学生との交流を行う。 <p>第3回 事前文献調査 [2月中旬～海外渡航まで]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・訪問する企業に関する知識や情報を文献や情報検索を用いて収集し各グループで共有し、渡航計画を策定する。 <p>第4回 企業訪問 [2月24日(金) 12時20分～17時25分]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・海外企業と日本企業との違い及び両者の特徴を把握することを目的とし、企業訪問(パナソニックヘルスケア株式会社重信工場)を実施。 <p>(実習スケジュール)</p>	
日程	概要
12時00分	愛媛大学城北キャンパス発
13時00分	パナソニックヘルスケア株式会社着
13時10分	ガイダンス 企業概要説明・課題付与(パナソニックヘルスケア株式会社における人材育成の状況について) 職場見学
15時10分	休憩
15時20分	従業員インタビュー(事業統括者層) 約45分 12名を3グループに分けて演習形式で実施
16時05分	従業員インタビュー(若手社員) 約30分 学生、従業員1対1で実施
16時45分	パナソニックヘルスケア株式会社発
17時25分	愛媛大学城北キャンパス着

インドネシアにおける実習スケジュール 3月5日～10日
<p>1日目 3月5日(日)</p> <p>松山空港1階エレベーター乗り場付近ロビー10時30分集合 松山11:55 NH590⇒東京(羽田空港) 13:15 羽田空港第2ターミナル14:05⇒成田空港第1ターミナル15:30 ⇒東京(成田空港) 17:55 NH835⇒ジャカルタ(スカルノ) 23:55 ⇒ホテルリムジンにて空港周辺ホテルチェックイン</p>
<p>1日目 3月6日(月)</p> <p>ホテル(借上げバスにて) 10:00⇒PT Panasonic Healthcare Indonesia12:00 昼食12:00～13:00(パナソニックヘルスケア内にて) PT Panasonic Healthcare Indonesia13:00⇒PT.FUKUSUKE KOGYO INDONESIA13:10(借上げバスにて) ガイダンス(講話等含む) 13:30～15:30 アクティビティログ作成15:45～16:30 PT.FUKUSUKE KOGYO INDONESIA17:00⇒PT Panasonic Healthcare Indonesia17:10⇒飛鳥17:30</p>
<p>受入企業合同懇親会(飛鳥) 17:30～19:30 飛鳥19:30⇒ホテル21:00(借上げバスにて) ※PT Panasonic Healthcare Indonesiaにて現地が必要となる現金(宿泊代・食費・土産物代等)を両替</p>

<p>3日目 3月7日(火)</p> <p>朝食6:30</p> <p>ホテル7:00⇒実習先 (PT.FUKUSUKE KOGYO INDONESIA 8:50・PT Panasonic Healthcare Indonesia9:00) (借上げバスにて)</p> <p>ガイダンス・職場見学・職場体験・インタビュー9:00~12:00</p> <p>昼食12:00~13:00</p> <p>ガイダンス・職場見学・職場体験・インタビュー13:30~16:30アクティビティログ作成16:30~17:00</p> <p>PT Panasonic Healthcare Indonesia17:00⇒PT.FUKUSUKE KOGYO INDONESIA17:10⇒飛鳥17:30 (借上げバスにて)</p> <p>夕食17:30~18:30</p> <p>飛鳥19:30⇒ホテル21:00 (借上げバスにて)</p> <p>※インタビューは事業統括者層及び従業員層に対し行う。事業統括者層は、各グループにつき1名で、従業員層はマンツーマンでインタビューを実施</p>
<p>4日目 3月8日(水)</p> <p>朝食6:30</p> <p>ホテル7:00⇒実習先 (PT.FUKUSUKE KOGYO INDONESIA 8:50・PT Panasonic Healthcare Indonesia9:00) (借上げバスにて)</p> <p>ワーク (PT Panasonic Healthcare Indonesia・PT.FUKUSUKE KOGYO INDONESIA ミーティングルームにて)</p> <p>9:00~16:30</p> <p>職場見学・インタビュー後の現状・問題をとりまとめるとともに、持続可能性の観点から解決策を立案する</p> <p>昼食12:00~13:00</p> <p>※当該期間中は、問題テーマごとのグループでの協働作業を行う。グループの主体的行動を促すため、原則自由行動とする。学生は、教員による指導、あるいは、訪問企業社員へのインタビューにより上記作業を進める。</p> <p>アクティビティログ作成16:30~17:00</p> <p>PT Panasonic Healthcare Indonesia・PT Panasonic Healthcare Indonesia17:00⇒・PT.FUKUSUKE KOGYO INDONESIA17:10⇒飛鳥17:30 (借上げバスにて)</p> <p>夕食17:30~18:30</p> <p>飛鳥18:30⇒ホテル20:00 (借上げバスにて)</p>
<p>5日目 3月9日(木)</p> <p>朝食6:30</p> <p>ホテル7:00⇒PT Panasonic Healthcare Indonesia9:00 (借上げバスにて)</p> <p>プレゼンテーション会 (個人発表、フィードバック含む) (PT Panasonic Healthcare Indonesia 会議室 VIPIIにて)</p> <p>9:00~11:30</p> <p>お別れ会 (PT Panasonic Healthcare Indonesia ConferenceC) 12:00~13:00</p> <p>PT Panasonic Healthcare Indonesia13:00⇒ジャカルタ市場15:00 (借上げバスにて)</p> <p>視察、自由行動15:00~17:00</p> <p>夕食17:30~18:30</p> <p>ジャカルタ市内18:30⇒ホテル20:00</p>
<p>6日目 3月10日(金)</p> <p>ホテル発 (ホテルリムジン) 4:30⇒ジャカルタ国際空港5:00</p> <p>ジャカルタ国際空港 06:25 ⇒東京 (成田空港) 15:45⇒東京 (成田空港) 成田空港第2ターミナル</p> <p>16:15⇒羽田空港第2ターミナル17:35 東京 (羽田空港) 19:20 NH599⇒松山20:55</p> <p>第5回 レポート作成</p> <p>海外インターンシップに関するレポート (ティーチング・ログ) を作成し成果発表会 (使用言語英語・資料英語 4月中の開催) で発表する。</p>

3. パイロットプログラムの実施結果

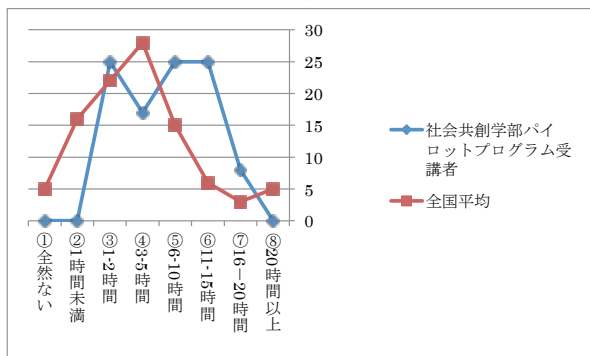
ここからは、本稿の主題である、パイロットプログラムの実施結果について述べる。パイロットプログラムには、社会共創学部1年次生12名が受講者として参加し、榊原 (環境デザイン学科)、寺谷 (地域資源マネジメント学科)、広垣 (産業マネジメント学科)、砂田 (社会共創学部事務課) のほか、ティーチング・アシスタント (TA) として、バスリ (大学院理工学研究科博士後期課程)、フィトリ (大学院理工学研究科博士後期課程) の6名が引率者として参加した。パ

イロットプログラムは正規授業外で行われるため、単位の付与は無い。また、受講学生は、学部のフィールドワーク・インターンシップ準備経費から、1名につき10万円の補助を受けた。

実施にあたり、参加学生に対する事前アンケート調査を行った。事前アンケートの質問項目は、日本版大学生調査 (JCSS) (山田ら、2004) を参考に作成した。JCSSとは、カリフォルニア大学ロサンゼルス校高等教育研究所が開発した「大学生調査 (College Student Survey: CSS)」に基づき、山田らが日本の

大学生の実態を反映して独自に開発したものである。JCSSは、「学習行動や価値観などをベースとした学習意欲、動機づけ、学習態度や習慣などの情緒的な要因を重視した項目から構成」（山田、2007）されており、このような調査を実施することによって、学生の学習意欲を確認できるとともに、教育改善のデータとしても活用可能となる。加えて、大学間、さらには、国際的な指標との比較が可能となり、これを公表することによって、当該大学や学部・学部の客観的データに基づいたアピールが可能となる。このように、パイロットプログラムにおける事前アンケートは、認知的な状況を確認した上で、事後アンケート及びその後の学生の追跡調査により、彼らの質的な変化について分析することで、パイロットプログラムの質的改善に資することを企図している。以下に代表的な質問項目を例示する。表2は1週間あたりの授業時間外学習を示すが、JCSS調査による全国平均と比較して学習時間は多い傾向にある。これは、受講者12名が、単位取得を伴わないパイロットプログラムに参加するという点から、主体的に学習に臨んでいることを示唆している。また、「海外インターンシップ」の授業内容に直接的に関わる質問項目は、表3、4、5になる。表3では入学時点に比べグローバルな問題の理解が伸びたとする学生が半数以上に上るが、これは、共通教育科目の受講、特に、12名のうち半数以上が第二外国語である「初修外国語」を選択履修していることが要因と推測される。表4では、卒業後に就職するための準備ができていないとする学生が大半であることが示される。この結果は、1年次後半の時点としては、当然の傾向であると言え、パイロットプログラムの目標に掲げる「異文化理解の促進」や「キャリアの方向性捉える」としている点は、妥当であると判断できる。最後の、表5では、海外への渡航経験が無い学生が3名という結果が確認されたため、該当者を確認した上で、事前のガイダンスや、渡航時において渡航前の準備・諸手続きや、メンタル面の確認など、個別にケアすることとした。

表2 1週間の授業時間外学習



「全国平均」は2007年に実施されたJCSS調査結果を示す。

全国の国・公・私立大学・短大16校の在学学生を対象とし、有効回答数：6,228人。

表3 グローバルな問題の理解（入学時点との比較）

回答	平均	合計
大きく増えた	17%	2
増えた	50%	6
変化なし	25%	3
減った	8%	1
合計	100%	12/12

表4 卒業後に就職するための準備の程度（入学時点との比較）

回答	平均	合計
大きく増えた	17%	2
増えた	33%	4
変化なし	50%	6
合計	100%	12/12

表5 海外への渡航経験

回答	平均	合計
旅行したことがある	50%	6
1か月未満のホームステイ・留学	25%	3
渡航経験なし	25%	3
合計	100%	12/12

事前アンケートのほか、渡航前に課した事前学習内容は表6のとおりである。表中の2、3、5に関わる企業訪問レポートでは、①企業概要、②企業訪問時のインタビュー内容（事業統括者および若手社員）、③インタビューで明らかになったこと、を明記させた。また、4のラーニングログでは、国内外の訪問先の企業ごとに、①パイロットプログラム受講に際しての目標、②学習内容、③卒業後の進路に向けた考察、を明記させ、企業組織の国際間比較が可能となるような仕組みを設けた。

表6 インドネシア渡航までに行う課題内容等

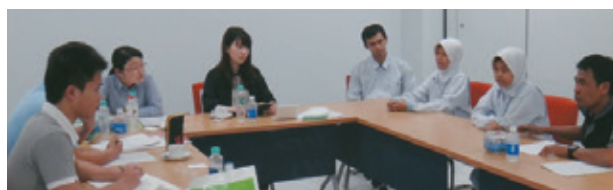
課題内容	期日
1. 事前アンケート	2月19日（日）
2. 企業訪問レポート（日本業用） （作成しPT Panasonic Healthcare Indonesiaに事前送付）	2月21日（火）
3. 企業訪問レポート（上記以外）	2月27日（月）
4. ラーニングログ （1. 目標、2. 学習内容）	2月27日（月）
5. 企業訪問レポート（海外企業用） （作成しパナソニックヘルスケア・PT.FUKUSUKE KOGYO INDONESIAに事前送付）	2月27日（月）

次に、インドネシアの企業訪問について述べたい。インドネシアでの実習は、12名を3班に分け、PT Panasonic Healthcare Indonesiaへ2班8名を、PT.FUKUSUKE KOGYO INDONESIAへ1班4名が訪問する方式とした。前掲表2の海外インターシッパイロットプログラム実施要項に示したように、大きな実習の流れは、①企業概要説明、②企業が抱える課題の提示、③企業内見学、④事業統括者へのインタビュー、⑤従業員へのインタビュー、⑥課題の考察、⑦プレゼンテーション資料の作成、とした。一方で、短い実習期間を考慮し、課題解決の提案は任意とすることとした。上記④、⑤、⑥について各社の実習状況を簡単に述べたい。

PT Panasonic Healthcare Indonesiaでは、3月7日（火）の企業見学後、平野社長、東條副社長およびジョハン部長に対して質疑応答を行った。その後、2班に分かれて、従業員インタビューを行った。協力いただいた現地従業員は、各班4ないし5名の合計9名であり、各部門の中堅層であった。なお、この中堅社員に対するインタビューは、平野社長が部屋中央で仕事をしながら同席し、時折議論に加わるなど、くつろいだ雰囲気の中、3時間程度実施された。3月8日（水）には、参加学生が班ごとにプレゼンテーション資料の作成作業を行った。この際、担当教員は、班員全員による全体の報告内容の検討、役割分担の確定、各自の分担報告内容の検討およびパワーポイント資料作成を指示した。その際、国際学会での報告原稿を例として受講者に示し、英文報告の骨組み（Introduction, 本文, Conclusion）や言い回し、内容を整理して番号を振る（First, Secondly, ……）などをアドバイスした。一方で、2班のうち、一方の班は、ホワイトボードを活用しつつ、確実に準備作業を行ったのに対して、もう一方の班は、全体の報告内容をなかなか確定できずにいるなど、班ごとの準備進捗状況に差が生じた。

PT.FUKUSUKE KOGYO INDONESIAでは、3月7日（火）の企業見学の後、従業員へのインタビューを行った（右写真）。1人20分程度を目安に、ミーティングルームに従業員を一人ずつあるいは複数人招いて、それぞれTAおよび担当教員の通訳もしくは補助を得ながらインタビューを行った。インタビュー内容は、生産および労務管理、モチベーション等であった。3月8日（水）は、先日に引き続き工業の工場見学を行いながら、従業員に対する質疑応答を行った。工場見学終了後、引き続きインタビュー、座談会を行った。

実質2日間の実習の後、3日目にプレゼンテーションを行うというスケジュールのため、8日は各班とも



夜を徹しての準備作業に追われることとなった。特にプレゼンテーション資料は英語での作成を指示していたため、英語表記や体裁など、TAの2名が各班を指導しながらの作業となった。3月9日（木）の企業側への報告会は、PT Panasonic Healthcare Indonesiaにおいて、愛大関係者および各社から指導に携わった関係者が参加して実施された。プレゼンテーションの内容は、授業目的・目標に即し、次のとおり設定した。

表7 評価項目

1. 訪問企業の実態を論理的に表現している
2. 日本企業との対比から分析を行っている
3. 訪問企業の課題を的確に把握して表現している
4. 課題解決のための解決策を持続可能性の観点からわかりやすく表現している
5. プレゼン資料の英語表現は適切で、的確に英語を活用し聴衆に伝わる内容である
6. プレゼン資料の内容は聴衆に伝わる内容である
7. 質問に対する回答が的確である

※各4段階で、強くそう思う(3点)、そう思う(2点)、あまり思わない(1点)、まったく思わない(0点)で評価

プレゼンテーションの評価は、引率者、各社関係者および受講者により行われ、表8のような結果となった。評価の傾向として、企業の現状把握に関わる評価項目1、2およびプレゼン技術に関わる評価項目5、6、7の評価が高い一方で、企業の課題発見、解決策の提示に関わる評価項目3、4の評価が低いことが示される。評価項目3、4は授業目標において達成されるべき中心的項目である。実習スケジュールが非常に短いことを考慮すれば、第1段階となる現状把握までができて、課題発見、その解決策の提示までの時間が確保できなかったという解釈ができるが、一方で、本パイロットプログラムにおいてあらかじめ設定した課題「社員がやりがいを感じ、成長できる仕組み」が何なのかが明確に学生に伝わっていなかったとも推測される。さらに、付け加えるならば、各班ともに、各企業の「社員がやりがいを感じ、成長できる好事例」について報告していたこと、一方で、課題を提示しきれなかった点は、恐らく初めてとなるであろう、企業訪問という、彼らの経験、および知識の浅さから説明できよう。授業実施に際してはこのことに注意することが必要である。

表8 評価結果

区分	評価項目1	評価項目2	評価項目3	評価項目4	評価項目5	評価項目6	評価項目7	合計点
1 班平均	2.2	2.1	1.8	1.7	2.1	2.1	1.5	13.3
2 班平均	2.2	2.2	1.8	1.6	2.2	2.5	2.4	14.5
3 班平均	2.2	2.5	1.9	1.7	2.5	2.3	2.7	15.8
総平均	2.2	2.3	1.8	1.7	2.2	2.3	2.2	14.5

注) 評価者総数はN=18で、表中の数値は平均値を示す

4. 課題および実施へ向けたプログラムの提案

本パイロットプログラムは、授業実施で予定している、10日間を大幅に圧縮した、4日間という非常に短いスケジュールでの実施となった。このため、授業実施後のアンケートにおいても、スケジュールに対する不満の声が多く寄せられた。今回の渡航中の体調不良者は1名のみで、深刻な事態には陥らなかったものの、授業スケジュールは無理のないものに設計する必要がある。海外プログラムでは、環境変化に対する心的ストレスも加わることとなり、参加する学生の体調やメンタル面のケアが強く求められる。また、海外プログラムという点から、異文化体験も授業内容に組み込む必要がある。事後アンケートにおいても、この点についての指摘は多く寄せられている。今回、郊外の散策や従業員の自宅訪問という体験を行ったが、授業実施時には、週末の休業日を利用して、現地大学生との交流プログラムなどを組み込むことも効果的であろう。また、授業実施においては、課題発見をいかに行うかも今回のパイロットプログラムにおいて浮き彫りとなった大きな課題である。授業実施の際は、今回行った国内、海外の対比に加え、企業間比較を行う事前文献研究ないしは実習の設計が必要である。今回の渡航では、パイロットプログラムの実施と並行して、MM2100団地内において受入企業の開拓を行った。今後は、文献研究に加え、受入企業先を増やすことにより、現地における複数企業を訪問し、対比させることが可能となる。また、受講者数と引率者数を勘案した授業設計も、質確保の観点から重要である。今回は受講者を2グループ3班に分けてパイロットプログラムを実施した。授業実施時には、グループ間での指導の統一性・一貫性を確保することが求められる。また、危機管理上の観点から、引率者数と学生数のバランスをどうするかという課題もある。今回、1名の体調不良者が発生し、救急病院へ搬送するという事態があった。このケースでは、体調不良者の同伴者およびその他の学生の同伴者が必要ということから、渡航には最低2名の同伴者が必要ということになる。現在、授業

実施関係者間において、これらの授業実施上の課題を踏まえた実施案を策定中であり、再度訪問企業との実施へ向けた議論を開始させる予定である。一方で、実施後のアンケートからは、コミュニケーション力の重要性、特に英語力の必要性を感じていることが確認されたとともに、海外での社会体験をきっかけに、学部における学習に意味を見出し、具体的な取組を開始した学生や、「今自分がなすべきことが分かった」など、明らかな行動変容を伺わせるコメントが散見された点は、本パイロットプログラムにおける成果であり、同時に、低年次での海外体験の必要性を示唆するものとも言えよう。一方で、学生の自己評価結果を踏まえ、引き続き受講学生の行動変容を調査することで、本パイロットプログラムの真の成果を明らかにするとともに、海外プログラムのあり方、必要性について検証する予定である。

謝辞

本パイロットプログラムの実施に際しては、PT Panasonic Healthcare Indonesiaの平野社長、東條副社長のほか多数の社員の方々、PT.FUKUSUKE KOGYO INDONESIAのシギト社長のほか多数の社員の方々が、およびパナソニックヘルスケア株式会社重信工場の神野工場長、大下課長ほか多数の社員の方々にプログラムの構築過程から、実習時に至るまで多大なるご協力をいただいた。以上の方々に心より感謝申し上げます。

注

- 1) 本稿では、トランスディシプリナリー・アプローチを「既存の学問分野を最大限活用するとともに、科学者とステークホルダーとが課題解決思考力とサーバンントリーダーシップを活用することによって生まれる知の統合を図ること」と定義する
- 2) 本稿では、地域ステークホルダーを、地域住民、企業、NPO、行政機関などと定義する。

参考文献

- 折戸晴雄・服部治・横山皓一編 (2015) 『インターンシップ入門』、玉川大学出版
- 山田礼子 (2007) 『転換期の高等教育における学生の教育評価の開発に関する国際研究』、平成16—18年度科学研究費補助金研究基盤研究 (B) 研究成果報告書

